

『高慢と偏見』——「影」のない世界

——作者の姿勢と語りをめぐって——

伏見 親子

ジェイン・オースティン (Jane Austen) は『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice*) を書いた後、それを評して「あまりにも軽快で明るくきらきらしている。陰影を欠いているのです。」⁽¹⁾と言っている。確かにこの「影」の無さはこの小説を貫いている大きな特徴である。

それは決してこの作品が単に楽天的であるとか、或いは深みが足りないということではない。作品の喜劇的世界を脅すようなある種の力エネルギの存在が、小説の内側にもまた背景といった外側にも認められないということなのである。主な事件は登場人物達の結婚によって治まり、全ての人物が各々与えられた位置にそれなりに満足して物語は終わっている。作者は彼等を裁くというよりはむしろ受け容れているのである。例えば、この「陰影」を求めて書かれた次の作品『マンズフィールド荘園』 (*Mansfield Park*) の結末と比べてみると良い。小説は確かにエドモンドとファニーの幸せな結婚で幕を閉じる。しかしその背後には、駆け落ちの末信用も愛も失い絶望とファニーへの嫉妬を抱えたマライアが一種のエデンの園である「マンズフィールド荘園の視界と保護」⁽²⁾から閉め出されて、ファニーを憎悪するノリス伯母と暮している。そうして初めてマンズフィールド荘園の門の中が平穩に治まっているのである。「さほど

ひどい過ちを犯さなかった人達全てに、まあまあ我慢できる気楽な状態を取り戻してあげよう。」(MP, p. 446) と言う時、登場人物達が作者によつて裁かれていることは明らかである。言い換えれば、『マンスフィールド莊園』には作者に裁く者としての姿勢がはっきりと見られるのである。その点、作者の態度は『高慢と偏見』においてはより寛大で、『マンスフィールド莊園』ではより厳しいと言うことができるであろう。即ち「陰影」の有無は、作者が作品の世界に対して全能の「神」^Vとして示す姿勢の違いから来ているのだ。

本論では『高慢と偏見』におけるオースティンの現実の捉え方と作品の世界に対する姿勢を、語りの手法を考慮に入れつつ検討していきたいと思う。

『高慢と偏見』では、ダーシーへの偏見の極みに達したエリザベスが当のダーシーから求婚されて丁々発止とやり合うハンズフォードでのクライマックスシーンを境にして、その前半と後半とでは語りの視点がかなり違ってくる。

オースティンの小説にあつて作者は全能の存在であるけれども、何も全てを語る必要はない。全てを知っている作者は語りを制限する自由も持ち合わせているのだ。⁴⁰ 所謂サスペンスの技法であるが、特に前半では語り手の介入はかなり制限され、専ら読者は冷めた知性を持ちながらも偏見に囚われたエリザベスの視点から物事を見ることを余儀無くされる。物事に対する解釈や判断が読者の裁量に任されている部分がかなりあるのだ。その結果、読者はエリザベスが自らの誤謬に気づき成長していく過程をある程度共有することになる。読者もまた作者によって学ばされているのである。それ程作者の位置は高く、またそれ程作者と読者、さらには作者とエリザベスの距離は大きいのである。ベネット一家が住むロングボーンの近所ネザーフィールドに越して来た金持の好青年ビングリー氏は一家の長女ジェインと忽ち恋に落ちる。一方その友人で名家の誇り高いダーシー氏は打解けにくい性格で、舞踏会で踊りの相手として勧められた次女エリザベスのことを「まあまあ綺麗だが私の気をひく程じゃない。」⁴¹と言ったのを小耳に挟ん

だ当の彼女は心中穏やかではない。ところが最初彼女の外見には特に心魅かれなかったダーシーがやがてその内から放たれる知性の魅力に気づく。

ビングリー氏の姉に対する心遣いを夢中になって観察していたエリザベスは、自分自身が彼の友人の関心の的になっているとは思ひもけなかった。…彼は彼女の濃い色の目の美しい表情で顔が大層冷嘲にひきたって見えるのに気づき始めた。…これについては、彼女は全く気づかなかった。彼女にとって彼はただどこでも愛想良くできない男であり、自分を踊りたくなる程きらいだとは考えない男であった。

彼は彼女をもっとよく知りたいと願うようになった。それで話しかける手初めとして彼女と他の人々との会話に注意し始めた。これには彼女も気がついた。(p. 70)

ここは強力な語りの介在によって作者と読者、読者とエリザベス、ダーシー、さらにエリザベスとダーシーの関係が鮮やかに浮かび上がる場面である。語り手は「気づく」という知覚認識の行為を示す様々な言葉を使って、^(a) 各々が鮮やかに位置づけている。こういった語り手による明快な定義づけは、少なくともこの場面においては、作者と同じ視野を与えることによって読者を作者と同じ位置に引き上げる。読者は事エリザベスとダーシーの間柄に関する限り作者と同じ位置を保ち続ける。即ち読者は、ダーシーがエリザベスに好意を抱き始めた一方、彼女の方は彼の注目には気づいたもののそれが恋に通じる性質のものとは思ってもみずむしろ嫌っている——嫌な男性からの注目程腹が立つものはない——という二人の関係、一方が恋心を募らせていきもう一方が嫌悪を深めていく過程を、客観的に追っている立場にある。明快な語りのおかげでこの二人の関係を見る時には読者はエリザベスよりもずっと優位に立つし、ハンズフォードの場面までその判断を誤ることはない。

読者の判断が試されるのは、エリザベスが友人シャロット・ルカスとビングリー、ジェインの関係を話し合う時、そしてエリザベスがダーシーの人柄や過去の行為に関する話を二枚舌のウィカムからきかされる時、この二つの場面

においてである。これらはエリザベスのダーシーに対する評価を決定し、ハンズフォードでのクライマックスを導き出す最も重要な場面である。しかし先程も述べたように前出の場面程明瞭な語り手による定義づけは前半では殊に稀であり、ここを支配しているのも会話即ち各々の人物の視点から示される見方である。読者は主にそれらを通して自ら判断しなければならぬ。作者は何ら事実を差し出さず、語りは制限される。むしろ場合によっては、作者は読者の自由な解釈に任せるどころか、その判断に微妙な影響を及ぼし歪みを与えるような一筆^{タッチ}を加える。

ジェインは「穏やかな気質と常に変わらぬ快活さが非常に強い感情と結びついた」(p. 68) 性格の為、ビンググリーに對して抱く愛情が余所目にはよくわからない。エリザベスはうわさの種にならないのを喜ぶが、シャロットはそれでは当の相手にも気持が伝わらないではないかと言う。

「ささやかな好感を抱き合うのはよくあるわ。でも相手から励ましを受けないで本当に恋するようになるには余程強い心臓の持ち主でなくてはね。十中八九、女は自分が感じている以上の愛情を示した方が良いものよ。」――

「あらゆる時間が二人の語らいに使われるわけにはいかないわ。だからジェインは彼の注意を一人占めできる時間を最も有効に使わなくてはね。すっかり自分のものにした時には、好きなだけ恋に落ちる暇があるのですもの。」

「あなたのやり方はいい結婚をしたいという願いの他に何も問題にしない時には結構なものですわ。」(pp. 68-69)

シャロットの意見は的を得ているにも拘らず全面的に是認できるものではない。エリザベスと同様読者も愛情を二の次にした利己的な便宜主義を見てとり、反発を覚える。そしてそのまま通り過ぎてしまう。シャロットの観察眼を評価せずに、そこから導き出された彼女の「やり方」^{プラン}に現われた俗物根性のみに目を奪われてしまう。読者は巧みにエリザベスの視野に引き込まれ、客観的視点を失ってしまうのである。ともあれ、ある日突然ビンググリー兄妹とダーシーはロンドンに行ってしまう、ジェインは事実上捨てられた形になる。

それより少し前、ロングボーン近くの町に軍隊が駐留してベネット一家は士官達と交流をもつ。中でも特に際立

って人好きのする美男子がウィカムで、エリザベスは彼が先代のダーシー氏の家令の息子で先代から教会職を譲られる筈であつたのを死後ダーシーがその権利を踏みにじつたという話を、ウィカム自身の口から聞かされる。読者も彼女同様ただ彼の話を聞かされるだけ、言い換えれば彼女と同じ視野を与えられるだけである。この点に関して作者はその真偽の程を決定する事実や語りを全く差し挟まないが、ビングリーがダーシーの人柄を保証している一方ウィカムを必ずしもほめてはいないことをジェインをして語らせている。しかし作者は巧妙にも、ビングリーがウィカムを直接には知らないと言わば彼の証言がマイナスになる点をも付け加え、しかもビングリー嬢という腹黒い人物にウィカムの人柄を非難させているので、逆に一層エリザベスはダーシーに対する偏見を深めることになる。一面識もない人間の言うことが必ずしも外れているとは限らないし、腹黒い人物の言うことが全て嘘とは限らない。ここにエリザベスと恐らくは読者も、足をとられるのである。

ただ作者はそれ自体大した事件ではないがウィカムの人物評価に関してはかなり含みのある事実を一つ示している。彼がその関心をエリザベスから最近財産を得た娘に移したのである。しかしこの事実が直接ダーシーとの財産問題に結びつかないので、読者にしてもウィカムの人柄について疑問を抱くとしても、それでダーシーの人柄を是とするまでには至らない。

ビングリーがジェインの許を去つていったのにダーシーが役買っていることを薄々感づいていたエリザベスは、ウィカムの話で益々嫌悪を深めていく。この離間に関する疑惑がダーシーの従兄の言葉で確信となつた時、突然ダーシーから愛情とそれに抗う自尊心——彼女の地位や親戚関係が彼よりはずっと低いことを縷々と述べたのだ——を洗いざらいひっくりめた告白と求婚を受けるのである。愈怒り心頭に発した彼女は彼の求婚態度とジェインとウィカムの二件に関して鋭い非難を浴びせ、拒絶する。

翌日彼女はダーシーの手紙を受け取る。そこには、自分は確かにジェインとビングリーの仲に干渉したがそれは

「詳しい観察」の結果ジェインの側に「特別な愛情の徴候が何も見られなかった」(p. 228) 為である事、またウィカムは自ら教会職を大金と引き換えに放棄して浪費した揚句その後の援助を断ったダーシーへの復讐と財産目的で妹ジョージアナを誘惑した事が証人の名を誉げて記されていた。

エリザベスは眼前に示された事実に衝撃を受け、自分の盲目を悔いる。しかし読者としてどれ程自分の判断を誇れようか。読者は確かにダーシーとエリザベスの間柄に関してはその進行を見渡せる視野に立っている為に彼の彼女への愛情は見通せるけれども、彼の人物像については主に彼女の視点から示されるので彼女以上に何も知ってはいないのだ。読者もまた手紙によって目覚め、回想の中でこれまでの場面に隠されていた様々な意味を読み取るのである。⁶⁾ 人が生きる現実とは、それぞれの主観や思惑によって歪められた情報と意見が、客観的な事実と複雑に入り乱れている空間なのだ。作者は読者を否応無くエリザベスの視野に引きずり込んで一連の成り行きに参加させ、共に事実を慎重に吟味することを学ばせているのである。

オースティンの小説の中で『高慢と偏見』の前半程巧みにプロットへの読者の参加を誘っているものは他にない。そしてこの小説には語りの制限と女主人公に置かれた視点という二点の他に、作者の視点を示す助言者たる人物もいないに等しいのである。『H』(Emma)のタイトルと同名の女主人公には常に彼女を見守り続ける賢明なナイトリー氏が、『分別と多感』(Sense and Sensibility)のメリアンには思慮深い姉エリナが、『ノーサンガー僧院』(Northanger Abbey)のキャサリンには事ある毎に論してくれる恋人ヘンリがいた。しかし『高慢と偏見』ではそういう位置にいるのは僅かに母方の叔母ガーディナー夫人とジェインくらいである。夫人はエリザベスが最も欺かれている時にウィカムの打算的な点を指摘した程度で、一方ジェインの方はエリザベスが「あなたは誰にも欠点を見つけたことがなくて、あなたの目には世間は全て善良で気持が良いのですわ。」(p. 62)と言うように、あまりに人が好すぎてむしろアイロニーの対象になってしまい、頭の鋭いエリザベスに対しては説得力がなく助言者としては不十分なので

ある。作者はそれ程徹底して自らの姿を隠している。読者にすら見えない程の高みにいるのである。

手紙を読んで偏見から醒め「この瞬間まで私というものがわかっていなかったのだ。」(p.237)と叫んだエリザベスは、自分の心の中を吟味し、物事を客観的に判断することを学んだのである。しかしそれだけで充分とは言えない。明快な視界を得た彼女は、この物語の後半では自分という一個の人間から世間というより広い視野に目を向けていくことになる。ここでは作者はこの物語の創り手として、エリザベスの前に次々と事件や事実を提示していく。一方正しく判断できる位置に立ち、語り手との距離がなくなったエリザベスは、前半のようにプロットを引っぱていく行動の人ではなく、自分の周りの人々や事件を受けとめて観察する側にまわっている。語り手の視点はエリザベスに重なり、彼女の観察は全面的に肯定される。誤謬に陥りそれに気づいてからもなお同じような過ちを幾重にも犯す『エマ』の女主人公——彼女は暇をもて余すあまり縁結びに凝り、自分自身をも含めた周囲の人々全ての人間関係を見誤るのだが——のように、いつまでも語り手の視点との間に微妙なずれを持ち続けるということはない。語りの構造という点からいえば『高慢と偏見』は『エマ』よりもずっと単純であるが、それだけにエリザベスという視点人物・媒体を通して作者の世界観、即ち作品における現実の捉え方が明確に示されることになる。読者もまたそういうエリザベスの視点から、プロットに参加するのではなく見て学ぶことになる。

『高慢と偏見』にはエリザベスとダーシーを取り巻いて様々なカプブルが登場する。

前出のシャロットは自分の「やり方」に従って将来のロングボーンの相続人で狭量かつ愚かな牧師コリンズ氏を手に入れる。それを知ったエリザベスはシャロットが「自ら選んだ運命にまますの幸福を見い出すことは不可能であろうという痛ましい確信」(p.166)を抱く。しかし夫婦の新家庭を訪問し「シャロットの満足の程度をよく考えた」結果、「全ては大層うまくいっている」と認め」(p.193)なければならなかった。家は居心地良く、シャロットは夫を

巧みに操縦して暮らしていた。

コリンズ氏が忘れられるときには真実あたりに安らかな雰囲気がい、そしてシャーロットが明らかにそれを楽しむ有様を見てエリザベスはコリンズ氏は度々忘れ去られるのだからと想像した。(p. 192)

結婚は本来一個の人間としての自己と他者の結びつきである。妻に「度々忘れ去られる」夫という関係は、二人の結婚が単なる世俗的な便宜の結果であると同時に、相手を一個の人間として認めていない他者不在の不毛な結びつきであることをも示している。エリザベスはそれを見抜きながらも、そこに一つの生活が成り立っていることを目の当たりにする。

〔シャーロットは〕訪問者らが去っていくのを明らかに名残り惜しく思っている様子であったが、同情を求めているようには見えなかった。家庭と家政、教区と家畜全て家庭の慰安に関わる仕事はまだ魅力を失っていないかった。(p. 244)〔棒線は筆者〕

作者は「結婚こそは財産の少ない教育ある若い婦人の唯一立派な人生への備えとなるものであった」(p. 163)当時の犯し難い現実の姿を踏まえ、「あらゆるより良き感情を犠牲にし」(p. 166)ながらも尚その上に成り立つ生活に満足しているシャーロットの姿に一つの結婚のありようを示している。

やがてガーディナー夫妻と旅行に出かけたエリザベスは、ダービシャーにあるダーシーの館ペンバレーを見物中不在のはずの彼と思いがけなく出会う。彼は冷淡な態度をとるところか、先の求婚の折に抵抗を示した身分の低い親戚であるガーディナー夫妻に紹介を求め、自分の妹をも紹介しビングリーまで伴って来た。ここでは物語の前半以上にダーシーに語りの視点が置かれていないので、読者は彼の言動から彼の中で何か変化が起こったらしいことを読み取るだけである。彼の人柄については手紙という視点を一時書き手に移す手段によって正当化^{レジティマイズ}されていたが、それでもまるで人が変わったように「尊大さ^{エグゼンシブネス}から解放された」(p. 283)態度にエリザベスは驚きを禁じ得ない。

ともあれ、ダーシーの態度の変化は一つの意味を持つ。それは貴族とも繋がりを持つ上層紳士階級にあることを誇りとする彼が、「商業で生計を立て、自分の倉庫の見える範圍に住んでいる」(p. 177) ガーディナー夫妻を受け入れたということである。最初エリザベスはダーシーが夫妻を「上流階級の人間だと思い込んでいる」と考え、「誰だかわかった時の彼の驚きはどんなものかしら。」(p. 275) と彼の反応を観察する。

その関係をきいて彼が驚いたことは明らかであった。しかし、…あちらへ行くどころかガーディナー氏と話を始めた。…エリザベスは喜び、また勝ち誇った気にならないではいられなかった。彼女は二人の間に交わされる話に非常に注意深く耳を傾け、叔父の聡明と趣味と礼儀正しさを示すあらゆる言いまわしを誇らしく思った。(pp. 275-276) (原文ではルビの部分はイタリックス)

ダーシーの「驚き」がエリザベスの想像した種類のもので違っていたことは作者が付した強調によって明らかである。彼は自分が低く見做していた人物が人間として立派で「紳士らしい」(p. 177) ことに「驚いた」のであり、自分が上流階級の人間であると思ひ込んでいたのが商人であることがわかって「驚いた」わけではなかったのだ。それを見てとったからエリザベスは「勝利感」を覚えたのである。ダーシーもまた限られた(もしくは自ら限ってきた)交際範圍からより広い世間に目を向けること、人間を身分に拘らず一個の人格として虚心に見ることを学んだのである。結末でめでたくエリザベスと結ばれたダーシーとガーディナー夫妻のその後を語ったところで作者を筆を置いている。それはいかにこの夫妻との関わりがダーシーの教育にとって、また作者の理想とする世界観を示すに当たって重大であったかを物語っている。

ガーディナー夫妻とは終始非常に親密な交わりを続けた。エリザベス同様ダーシーも心から彼等を愛し、エリザベスをダービッシュにつれてきて二人を結びつけるよすがとなった人達に対して最も暖かい感謝の気持を続けた。(p. 396)

エリザベスはダーシーの振舞に感謝し好意を抱き始めるが、二人の前には新たな障害が待っていた。エリザベス一

行の旅行中に末妹リディアがウィカムと駆け落ちしたのである。エリザベスはこれでダーシーとの仲も終わりと覚悟するが、彼は誰にも知らせずに二人を捜し出しウィカムに金を与えて結婚させ、ベネット一家を不名誉から救ってくれたのである。二人の結婚をきいてエリザベスは叫ぶ。

「なんて奇妙なこと／＼でもこれを感謝しなければいけないのね。二人は幸福になりそうもないし、彼〔ウィカム〕の人柄は下劣なのに、二人が結婚することを私達は喜ばざるをえないんだわ。」(p. 316) (ルビの部分は原文ではイタリックス)

結婚という形式がもたらすもの、それはいかに実質が伴わないものであっても一応の社会的信用、パスポートである。平たく言えば世間に対して何とか顔向けができるようになったのである。それを回復したことをエリザベスは感じとり「感謝」するのであるが、同時に結婚という枠の中に結婚生活が続く限り永久に封じ込められた不幸を見て「奇妙な」感じに打たれるのである。結婚という社会的な形は、その中に幸福をも不幸をも取り込んで一対の夫妻として社会に位置を占め機能していくのである。実際「情熱が道徳より強かったというだけで結びついた」ウィカムとリディアには「永久の幸福などありえなかった」(p. 325)けれども、二人はそのままの位置を『高慢と偏見』の世界の中では占め続けている。作者は二人のその後をこう書いている。

ウィカムの愛情はすぐに無関心へと転落し、リディアの方はそれより少しだけ長持ちした。彼女は若さと行儀にも拘らず、結婚生活が与えた世間的信用を捨てようとはしなかった。(p. 326) (棒線は筆者)

リディアの結婚は「情熱」即ち個人の感情だけに引きずられたもの、そしてシャロットの結婚は社会的な便宜の為になされたものとして両極にあるけれども、そのどちらもが便宜の為に結婚し情熱の為にそれを捨てた『マンズフィールド荘園』のマライアの場合のようにそこから飛び出させるような不穏なエネルギーを孕んではいない。作者の決定的な裁きがないというよりも、裁く者としての姿勢が作者の側にないのである。唯そこには結婚という本来喜劇的

なものを通して様々な人間が織りなす綾が描かれているだけである。しかしまたこの人間模様を描くことこそ、喜劇の本来のあり方ではなかっただろうか。

リディアとウィカムの事件はまた別の人間像を浮き彫りにする。ダーシーとベネット氏の一家の主・保護者としての姿、その資質である。リディアが駆け落ちできたのはそもそもベネット氏が父親として品行の良くない娘を家で監督する義務を果たさずに、彼女を自分の目につかない所に遣ることと一時の平安を得ようとしたからである。そしてウィカムはそんなベネット氏の無責任さを見抜いて、たとえリディアを餌食にしても「よその父親がそんな場合にするように行動したり考えたりすることはほとんどない」(p. 300)と踏んだのである。一方ダーシーは妹(当時リディアと同じ十五才)がウィカムと駆け落ちしようとしていることを「ほとんど父親のように尊敬している兄」に打明けるや「妹の体面と感情を思い遣って公に露見することを防ぎ、ウィカムに手紙を書いてすぐにその地を去らせ」(p. 331)ている。秘かに駆け落ちするや忽ち近所一帯にうわさが広まってしまったりリディアの場合と比べると、その違いは歴然としている。

またベネット氏は地主としての資質、責任感をも欠いていた。彼は持参金の少ない娘達の将来に備えてやることをせずに、息子をもうけて男の世嗣にしか権利のない限嗣相続^{エンテイル}を中断させ彼に面倒を看させようと考えていたのだが、それは土地を手放して初めて可能になることなのである。つまり、地主として先祖から受け継いできた土地を管理運営する義務を放棄して、⁽⁶⁾ 自分の父としての無責任を補うつもりだったのである。エリザベスは先のペンバレー訪問で見事に管理された庭園と邸宅を見て感嘆する。その風景は「神」である作者が彼女に与えた無言の啓示である。彼女はそこで初めて地主という地位と責任を理解し、⁽⁶⁾ おそらくはその外に広がる領地に暮らす人々の生活にも思いを馳せたのである。

兄として地主として主人として、どれ程数多くの人々の幸福がこの人「ダーシー」の双肩にかかっていることか／＼どれ程の喜びと苦しみを与える力を持っていることか／＼どれだけの善行と悪行が彼によってなされることか／＼(p. 272)

ダーシーと対照的なベネット氏の態度、全ての煩わしさから逃れようとする態度は、彼が皮肉屋であることと無関係ではない。「アイロニーは妥協の形態」⁽⁹⁾であり、不満にみちた現実を受け容れるにあたつてとられる消極的な姿勢である。アイロニーは対象から身を引き離すことによつて生じる。それは実生活にあつては彼が「愛する能力が無いこと」⁽¹⁰⁾を示す。そして彼がそうになった原因はと言えば、またもや結婚なのである。彼は若気の至りで「若さと美しさと上だけ気立の良さ」(p. 263)という一時的な美徳に魅かれて一生を愚かな妻に縛りつけられてしまった男性である。知性の点で全く不釣合なこの結婚は彼に人生に対する愛着を失わせ、彼を「諦観者」^{フィロソファー}(p. 263)にしてしまったのである。彼は自分の知性を受け継いだ娘エリザベスだけを受け容れた。彼女の結婚は彼にペンバレー訪問という社会参加を僅かながら回復させたが、それ以上に彼の結婚生活が変わることはない。

やがてビングリーがその友ダーシーと共にネザーフィールドに帰宅、ジェインと結ばれる。これまで作者が様々な提示する結婚の諸相をただ受けとめる側であつたエリザベスは、ダーシーの再訪で再び行動する側にまわる。彼女は自分達の結婚を阻止しに来たダーシーの伯母キャサリン令夫人を論破する。激怒した令夫人の言葉から彼女の愛の確信を得たダーシーは、彼女が二人で散歩する機会を作るや求婚する。語りの視点を持たないダーシーの愛情の経緯が、続く互いの心中を打ち明ける会話の場面で明らかにされる。エリザベスは自分がハンズフォードで発した非難の言葉「もっと紳士らしくお振舞になれば」(p. 224)が彼に自らの利己的で狭量な自尊心に気づかせ、相手をも認め正當に評価する真の「紳士らしさ」に目覚めさせていったことを知る。二人が最終的に到達した所は、その出発点――「高慢」と「偏見」――こそ違え驚く程似通っている。共に自己を厳しく見詰め直すこと、その上で虚心に他者を判断することである。

ダーシーはビングリーにジェインの愛情を保証して結婚の実現に力を貸したことも語る。この二人はエリザベス達とは反対に素朴に出会ってごく自然に恋に落ち、あらゆる美点を持ちながらもそれを支える強さを欠いている為、周囲の状況に流されるまま幸にして一緒に成れたカップルである。リディアとウィカム、シャーロットとコリンズ夫婦が、エリザベスのような社会的立場にある若い女性が陥り易い運命の両極であるなら、ジェインとビングリーはエリザベスとダーシーがその知性と性格の強さを欠いていたならば、かくなったかもしれないカップルなのである。⁴⁴⁾また二人の結婚は「互いの趣味と感情が似通っていること」(p. 357)に幸福の源があり、ダーシーが「理解力も気質も彼女〔エリザベス〕自身のものとは違いながら、彼女の望むところにしっかりと合っていた」(p. 325)点でも好対照をなしている。

こうしてあらゆる結婚の姿が出揃い、そこに在る人間模様が浮き彫りにされたところで物語は大団円を迎える。この章は作者の世界観、ひいては作者の作品における姿勢を知るにあたって短いながら重要である。読者はそこに改めて目もあやなタピストリのように繰り広げられた喜劇の世界を見る。エリザベスとダーシーが妹と住むペンバレーを頂点として、「三十マイルの範囲内に」(p. 393)ジェインとビングリーの新居があり、ベネット家の妹娘キティはいずれかの姉の保護下で暮らし、ベネット氏は度々その客となり、リディアとウィカムさえダーシーの援助を受けて何とか暮らしを立て、キャサリン令夫人もしぶしぶながら訪問することになる。オースティンが他の作品では専ら虚栄と欲望の場として描くロンドンすら、ここでは最も親しい交際を続けるガーディナー夫妻が住み、またダーシー夫婦が冬の館を持つ所である。『高慢と偏見』の世界は『マンスフィールド荘園』のように中に完全な幸福のみを閉じ込めてしまうのではなく、ペンバレーの館の窓から見晴らす眺望の如く、あらゆる方向にむかって大きく開かれ、裾野も豊かに広がっている。「ペンバレーの周囲に形成された配置の中にほとんど全ての人々の居場所がある」この作

品は、「オースティンの最も肯定的で寛大な小説の一つ」⁽⁴⁾であると言うことができる。

そしてその「寛大さ」として単なる現実無視の楽天主義からきたものでないことは、オースティンのとった語りの手法からも明らかである。彼女は全能の物語の創り手として、前半では語り手による定義づけや事実の提示を制限するサスペンスの手法によってプロットに読者の参加を求め、断片的な事実と情報の集積である現実にあつて真実を識別することの難しさをまざまざと見せて、女主人公と共に物事を虚心に捉えて正しく判断することを学ばせ、そして後半では明快な視野をもつようになった女主人公の前に、人生の幸福も不幸も全て中に閉じ込めて一組の夫婦として機能していく結婚というものの諸相を様々に展開していった。その上で大団円に至って一気にこの作品における自らの姿勢を示したのである。オースティンにあつて「現実の生活の緊張」⁽⁵⁾は決して忘れられず、それを踏まえた上で「明るくきらきら輝く」一瞬の、そしてそこで物語が終わり幕が下りるからには永遠の楼閣ベンバレー王国を創り上げたのだ。おそらく至福とはそういう瞬間のことを言うのだろう。この永遠の一瞬に、「影」はない。

註(1) Jane Austen, *Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others* (Oxford Univ. Press, 1979), p. 299.

(2) Jane Austen, *Mansfield Park* (Penguin Books, 1979), p. 457. 以下、本書からの引用は、本文中にMPと略し、頁数を示す。

(3) John Odamark, *An Understanding of Jane Austen's Novels* (Basil Blackwell, 1981), p. 102.

(4) Jane Austen, *Pride and Prejudice* (Penguin Books, 1978), p. 59. 以下、本書からの引用は、その都度本文中に頁数のみを示す。尚、使用したテキストの訳は、伊吹知勢訳『高慢と偏見』（講談社、世界文学全集巻一九七五）によるが、本文との都合上、筆者がかなり変えて使用した。

(5) 引用箇所原文出处は、'suspecting' 'find' 'unaware' 'attended to' 'notice' 等の言葉が使われている。

(6) Odamark, *An Understanding*, p. 12.

(7) Lloyd W. Brown, *Bits of Ivory: Narrative Techniques in Jane Austen's Fiction* (Louisiana State Univ. Press, 1973),

p. 162.

- (8) Jane Nardin, "Children and Their Families in Jane Austen's Novels," *Jane Austen: New Perspectives*, ed. Janet Todd, Women & Literature (New Series) Vol. 3 (Holmes & Meier Publishers, Inc., 1983), pp. 75-76.
- (9) *Ibid.*, p. 77.
- (10) Robert Higbie, *Character & Structure in the English Novel* (Univ. of Florida Press, 1984), p. 107.
- (11) Robert B. Heilman, "*E pluribus unum*: parts and whole in *Pride and Prejudice*," *Jane Austen: Bicentenary Essays*, ed. John Halperin (Cambridge Univ. Press, 1975), pp. 137-138.
- (12) Mordecai Marcus, "A Major Thematic Pattern in *Pride and Prejudice*," *Twentieth Century Interpretations of *Pride and Prejudice**, ed. E. Rubinstein (Prentice-Hall, Inc., 1969), p. 87.
- (13) David Monaghan, "The Complexity of Jane Austen's Novels," *Jane Austen: New Perspectives*, ed. Janet Todd, Women & Literature (New Series) Vol. 3 (Holmes & Meier Publishers, Inc., 1983), p. 93.
- (14) *Ibid.*, p. 95.

———大学院研究員———